グリム童話の小さな英雄たち
―― 『ヘンゼルとグレーテル』をめぐって

木　下　康　光

一

二百話を収めた『グリム童話集』(*Kinder- und Hausmärchen*以下KHMと略す)の中で『ヘンゼルとグレーテル』(KHM15 *Hänsel und Gretel*)は疑いなく『灰かぶり』(KHM21 *Aschenputtel*)や『赤頭巾ちゃん』(KHM26 *Rotkäppchen*)などとともに子供たちに最も人気のある話のひとつであろう。その人気の理由としてはなによりもまず主人公が聞き手(読者)と同じいたいけな子供であり、感情移入しやすいこと、とりわけ子捨てのモチーフは子供にとって最大の不安と言ってよい、心理学で言うところの分離不安を掻き立てるものであることが挙げられよう。よるべない子供にとって親による遺棄はなんといっても最大の関心事なのだから。さらに、この他人事と思えぬ幼い兄妹の運命への関心に加えて、夢のようなパンとお菓子の家のモチーフもとりわけ(飽食の時代といわれる今日ではもはや想像できぬほどに)強烈に子供たちの心を捉えたにちがいない。実際、ヘンゼルとグレーテルは抗いがたくこのパンとお菓子の家に引き寄せられたのだった。ところがこのおいしそうな、誘惑的なパンとお菓子の家は実は子供たちをおびき寄せるための罠で、そこには恐ろしい人食いの魔女が住んでいたのであり、ヘンゼルとグレーテルはまんまと魔女の罠にかかってその餌食となりそうになる。その恐怖が話を聞く子供たちの心を凍りつかせた後に、二人の機転とけなげな働き、そして兄妹愛によって逆に魔女を欺き、恐ろしい魔女を倒す段を聞くと、子供たちは安堵とともに拍手喝采を送るのだ。そして魔女の家で見つけた真珠や宝石をいっぱい持って家に帰り、性悪な継母のいなくなった父の家で父子三人幸せ

『言語文化』13-2：171－189ページ　2010.
同志社大学言語文化学会 ©木下康光

に暮らした、と聞くと、子供たちは心からの安心と満足を覚えるのにちがいない。

（兄妹が家に帰ると、二人を森に捨てることを主張した継母がその間に亡くなっていたとされるが、その詳しい事情は語られない。この話の原題は手稿の段階では『兄と妹またはヘンゼルとグレーテル』であった。『兄と妹』（*Brüderchen und Schwesterchen*）という題名を持つ別の話は最終版ではKHM11として収められているが、ここでは継母と魔女は同一人物となっている。『ヘンゼルとグレーテル』における継母と魔女の同一性は無意識的レベルのものと言えようが、継母が二人を起こすときの「お起き､こののらくら者」というその同じ言い回しが、魔女がグレーテルを起こすときにも使われていることで、両者の同一性が暗示されている。[1]）

子供たちは幼い二人の兄妹の運命の展開に固唾を飲んで耳を傾け、二人が果敢にも苦難を克服したとき、自分と同じ幼い仲間の英雄的働きに胸のすく思いをするのだ。たしかに二人の兄妹は物語の主人公（Held）であるだけでなく、見ようによっては冒険物語の英雄（Held）でもあるのだ。魔女を倒し宝を持って帰還するヘンゼルとグレーテルには竜/鬼/巨人を退治し、財宝を得て帰還する、神話や伝説に普遍的に見られる英雄像が投影されていないだろうか。

二人の兄妹の英雄ぶりはなによりもその沈着さと機知において示される。まずヘンゼルは夜、両親が床の中で子捨ての相談をするのを漏れ聞いたときも動ずることなく、むしろしくしくと泣く妹のグレーテルを慰めて、白い小石を道しるべにする妙案を思いつく、沈着冷静にして知恵ある者として登場する。

（二度目には外に出て白い小石を集められず、やむなくパン屑を撒いてすべて小鳥に食べられてしまうことになるが、これはヘンゼルの幼い愚かさを示す挿話として語られているのではなく、物語展開の要請としてなのである。これと同じ挿話が『ペロー童話集』では『親指小僧』[2]で語られている。ボルテ/ポリフカによる浩瀚な注釈[3]によるとその他の先行の類話では、道しるべとして撒かれるのは、1．おが屑－

2. 籾殻－3. 麻の実（モンターヌス『地の牝牛』[4]、1. 灰－2. 糠（バジーレ『ペンタメローネ』[5]、1. 糸－2. 灰－3. 豆（ドーノワ夫人）などである。[6]）

ヘンゼルはまた人食い魔女に捕えられて家畜小屋に入れられていたとき、どれくらい肥ったか見るため指を出すよう命じられると、指の代わりに小さな骨を出して目の悪い魔女を欺く狡知の持ち主であることを示す。ところでこの話は『オデュッセイア』中の一挿話[7]を思い出させる。ずる賢い英雄オデュッセウスは羊の腹にしがみついて目を潰された一つ目巨人キュクロープスを欺き、岩穴から脱け出すのに成功したのだった。KHM11『兄と妹』で魔女である継母の連れ子の娘が片目であったとされるのも、容貌の醜怪さの表現だけでなく、魔女の属性の暗示なのかもしれない。ちなみにロシアの昔話に登場する魔女ヤガーも盲目であったとされる。[8] すなわち目が悪い・片目（一つ目）・盲目というのはこれらの物語では端的に知恵の足りなさを表しているのではあるまいか。グリム自身の注釈[9]によると、人食いである家の主はスウェーデンの類話では魔女でなく巨人であり、シュヴァーベンの類話では狼だった。すなわち魔女、巨人、狼は記号的価値としては同じなのであり、その記号内容は〈恐ろしい・強大だが愚かな敵対者〉ということになる。してみればヘンゼルが指の代わりに骨を出して目の悪い魔女を欺く挿話はよく知られた国際的話型〈愚かな鬼〉あるいは伝統的な民話モチーフ〈欺かれた悪魔〉の一変奏にほかならないことに気づかされる。

二

弱小な者が強大な者を知恵と勇気によって打ち負かす話は神話、伝説、昔話のいたるところで見出される。グリム童話ではKHM20『勇ましいちびっこの仕立て屋』（*Das tapfere Schneiderlein*）がそのようなものとして最もよく親しまれたものだろう。布切れの一打ちで七匹の蝿を打ち殺し、われしらず成し遂げたおのれの功業に俄かな自信を覚えたちびっこの仕立て屋は旅に出るや、途中の森で巨人に出会う。そこで石の代わりにチーズをしぼったり、あるいは石と見せかけて小鳥を空に放り投げたりして巨人のど肝を抜く。ここの巨人にはギリシャ神話や古代北欧神話におけるような桁はずれに強大な

巨人の面影はもはやなく、愚弄・嘲笑の対象としての、無邪気な笑話の副主人公と化している。ここでの両者はまさに「大男総身に知恵がまわりかね」と「山椒は小粒でぴりりと辛い」を体現するものとなっている。ちなみにグリムは『ドイツ神話学』においてこう書いている。「小人は体力において人間に劣るが知力において勝る。それと同様に体力において勝る巨人は知力において人間に劣る。」[10]

仕立て屋が物語の主人公に択ばれたのは、本来強大な存在である巨人に対してコントラストを強めるためと考えられる。「勇ましい」と「ちびっこの仕立て屋」は本来語義矛盾であり、物語は英雄物語のパロディー、あるいはすでに笑話なのだ。ではなぜ弱小な者の代表あるいは典型として仕立て屋が択ばれたのだろうか。アルニムとブレンターノが編集した『少年の魔法の角笛』（1806年刊）[11]に見られる*Romanze von den Schneidern*などの民謡においても仕立て屋は矮小な臆病者として描かれている。ジャン・ジャック・ルソーは『エミール』の中で次のような途方もない仕立て屋に対する（また女性に対する）偏見を述べている。

> 「男子にはその性にふさわしい職業を、そして若者にはその年齢にふさわしい職業をあたえることだ。家に閉じこもって腰をかけてする職業､体を柔弱にするような職業はすべて若い男の好むことではないし､かれにふさわしくもない。若い男が自分から仕立て屋になりたいと思うことはけっしてない。男性のすることではないそういう女性の仕事を男性にやらせるには技巧が必要だ。縫針と剣とは同じ手であやつることはできない。もしわたしが主権者だとしたら、わたしは裁縫と縫針でする仕事は、女性たちと、女性と同じような仕事をせざるをえないびっこの男たちのほかには許さないことにする。」[12]

ルソーはこの箇所の続きに宦官を引き合いに出しているが、女の仕事である針仕事をする仕立て屋は本来不具者の職業で、最も男らしくない職業という社会的・文化的偏見が支配していたのだ。この物語の末尾で、寝言で夫の出自を知ったお姫様が我が身の不運を嘆き悲しみ、そのような惨めな境涯から救ってほしいと父王に懇願したのはそれゆえだった。仕立て屋はおよそ最も英雄に不似合いな存在だったのだ。それゆえまたこの誇張譚的笑話の主人公

にふさわしかったのだ。[13] 高貴な出の騎士ならぬ下賤の出の仕立て屋がその狡知と敏捷性によって王様から与えられた難題を果たし、美女と王国を手に入れるストーリーはまさに英雄物語のパロディーであるが、そこに庶民の願望夢の投影を認めるのは容易であろう。小さくて敏捷、勇敢で常に楽天的な仕立て屋はちょうどわが往年の喜劇王エノケンのように、無力で弱い民衆のヒーロー、庶民のチャンピオンなのであった。

（「縫針と剣」という言葉が先ほどのルソーからの一節に見られたが、KHM45『親指太郎冒険の旅』（*Daumerlings Wanderschaft*）では実際、なりは小さくとも胆力の大きい親指太郎がおのれを試すべく世間に出て行くにあたり、仕立て屋の父親は刀代わりに針を持たせてやるのである。もっとも17世紀イギリスの物語『親指トム』（*Tom Thumb*）[14]では小さな主人公はアーサー王の騎士としてイグサの剣を振るう。グリム童話の親指太郎は針を剣代わりに振るうことはないが、民間で語られるわが一寸法師は剣ならぬ針を使って鬼を降参させ、宝物である打ち出の小槌を奪い、この呪宝の力で人並みの身体を取り戻すとともにお姫様を得るという、典型的な竜退治型英雄譚となっている。ここで一寸法師は一旦鬼に飲み込まれやがてまた吐き出されるが、グリム童話の親指太郎（KHM37『親指太郎』*Daumesdick*およびKHM45『親指太郎冒険の旅』)も牝牛に干草と一緒に呑み込まれ、やがてまた体外に解放される。これらの挿話は『赤頭巾ちゃん』や『狼と七匹の子山羊』同様、死と再生のモチーフと言えよう。[15] ちなみに、この死と再生のモチーフは一寸法師の物語末尾の挿話においてもまた認められるのであるまいか。すなわちKHM1『蛙の王様』（*Der Froschkönig*）において醜い蛙はお姫様に力まかせに壁に叩きつけられることにより元の美しい王子の姿を取り戻したように、一寸法師も本来は打ち出の小槌で打ち殺されることで魔法が消滅するのではないだろうか。[16]
同じことはわが国の昔話の『たにし息子』についても言えるのである。『聴耳草紙』第三番『田螺長者』[17]では霊験譚の体裁をとっているが、関敬吾『日本昔話集成』134番『田螺息子』[18]に集められた類話の圧倒的多数において主人公は殻を打ち壊される、あるいは叩き潰されるこ

とによって美しい若者への変身を遂げる。ところで『聴耳草紙』の『田螺長者』に見られるのと同じ、小さな主人公が姿の見えぬまま馬を巧みに誘導する話がKHM37『親指太郎』でも語られるのは、果たしてもはや偶然の暗合と言えるのだろうか。）

三

小さく弱いものが強大なものに立ち向かう図はまさに原始の人間の姿そのもので、その意味で巨人ゴリアテに立ち向かう少年ダビデ（『旧約聖書』「サムエル記」上17章）は人間の元型的形姿なのであった。恐竜時代をおどおどと逃げまどいつつ生き延びた人類の祖先は、やがて進化発達して人類となっても大した身体的武器も持たず、熊や狼などの猛獣に抗して生きていくためには知恵と文明によるほかなかった。その代表が火と道具であり、そして人類に火をもたらしたプロメテウスはまさしく文化英雄ということになるのだが、その際プロメテウスは「非常にずる賢い、悪知恵を持った」[19]者とされ、火は天上から盗み出したものとされた。

幼児ヘルメスがアポロンの牛の群を盗んだように、窃盗は小さな英雄に付き物のモチーフとなっている。KHM37と45で語られる親指太郎の物語の双方において窃盗（土蔵破り）の挿話が存するのは理由のないことではないのかもしれない。アァルネ/トンプソンの話型索引AT328「少年が巨人の宝を盗む」に分類される『ジャックと豆のつる』[20]の主人公である少年ジャックも窃盗を三度繰り返す（金貨の入った袋、金の卵を産む鶏、歌う金の竪琴）が、この場合は、プロメテウス同様、天上という異界から盗み出すのである。

異界あるいは地の果てから宝を取って来るというモチーフはしばしば難題譚の形で語られる。このタイプの祖型とも言うべき最もよく知られた話は金毛羊皮を求めての冒険の旅の物語『アルゴナウティカ』であろう。主人公イアソンは叔父から王位返還の条件として、遠い異国のコルキスから巨竜に護られた金毛羊皮を持ち帰ることを求められたのであった。

英雄イアソンは50余名の仲間の勇士の協力と王女メデイアの助けによってこの難事業を成し遂げ、帰国の後メデイアと結婚する（メデイアは後日譚では捨てられることになるが）。別の神話的英雄テセウスも怪物ミノタウロス

を退治し、そのとき助けてくれた王女アリアドネと結婚する。わが日本神話でもこの竜退治型英雄譚の特徴を明瞭に認めることができる。すなわち高天原を逐われたスサノヲは出雲に降り立ち、八岐大蛇を退治してクシナダヒメ（奇稲田姫）を救い、妻とするが、その際、大蛇の尾から宝剣（天叢雲剣。草薙の剣とも呼ばれ、三種の神器の一つとして王権の象徴となる）を手に入れる。またオオクニヌシは黄泉の国の主たるスサノヲに課せられた難題を娘のスセリヒメの助けを得て果たし、宝物の太刀と弓矢、そして天の沼琴を奪い、ヒメを背に負って地上に逃げ帰る。

このように竜退治型英雄譚はハッピーエンドの総仕上げとして（あるいはまたメルヘンを成熟の物語と見る場合には主人公のパーソナリティーの確立の証として）主人公の結婚で終るのが一般であるが、その結婚相手となるのは多くの場合連れ帰った美女である。それはしばしば竜（大蛇）の生贄にされる乙女であり、あるいはまた鬼に奪い去られた妻女であった。

KHM29『三本の金の髪の毛をもつ鬼』（*Der Teufel mit den drei goldenen Haaren*）も竜退治型英雄譚の一変奏である。鬼退治の話は表面的にはされないが、主人公の若者が地獄（冥界）から持ち帰る三本の金の髪の毛はpars pro toto（全体に代わる部分）、すなわち鬼の首と等しいものと見なすことができる。それは主人公が七頭の竜を退治して王女を救い出し、美女と王国を手に入れる同じ竜退治型英雄譚のKHM60『二人兄弟』（*Die zwei Brüder*）における竜の舌と同じ機能と言えよう。KHM29で主人公を助けるのは最終版では鬼のお祖母さんであるが、初版では鬼の妻となっていた。この〈助ける女・保護する女性〉のモチーフは〈とりなす女〉としての聖母マリアのような母性の慈愛一般を表すもの[21]と取ることもできるかもしれないが、KHM29では主人公の妻となるべき王女はすでに別にいるのであり、結婚のモチーフはありえないがゆえに、連れ帰るべき美女の代わりにお祖母さんに変えられ、それによって本来の結婚のモチーフも〈とりなす女〉のモチーフに変えられたと考えることもできよう。

『ジャックと豆のつる』では主人公を助けるのはお祖母さんでなく巨人の妻である。主人公は少年なので結婚のモチーフはありえないにせよ、この物語ではまだ本来の古い形が残っていたのだと言えよう。[22]　わが桃太郎も異

界である鬼が島へ行って鬼退治をし、多くの宝物を得て凱旋するが、柳田国男はこの桃太郎に結婚のモチーフがないのを訝しく思い、今日残っている桃太郎の話は子供向きに語り変えられた結果、妻覓ぎの一条が省かれるようになったと推断したのだった。[23] ちなみに野村純一は〈勇者による地獄からの美女奪還〉のモチーフをもった桃太郎類話を「桃太郎」の原形として紹介し、金太郎（後に大江山に酒呑童子を退治する源頼光の四天王の一人坂田金時）をはじめとする「力太郎」型類話などもこれに関連づけている。[24]

ところで主人公の兄妹が森という異界に赴き、そこで魔女という竜や鬼と等価の恐ろしい敵を倒し、宝をもって帰還するというストーリーを持つ『ヘンゼルとグレーテル』の物語の基本骨格はまさに竜退治型英雄譚そのものと言えよう。起承転結的な「被害/困窮－旅立ち－闘いと勝利－帰還・結婚」というプロップ的図式を『ヘンゼルとグレーテル』に当てはめた場合、結婚のモチーフの欠如が目につくのであるが、子供向けの昔話としての「桃太郎」におけると同様、少年少女を主人公とする『ヘンゼルとグレーテル』においても性的モチーフが回避されたと考えられないだろうか。敢えてこの図式を当てはめるならグレーテルはヘンゼルの結婚相手となるべき位置を占めていることになる。つまり冒険の発端（旅立ちの契機）として捨て子物語あるいは継子譚が導入された結果、救出されて主人公の妻となるべき王女が妹に代えられたのだということになろう。すなわち『ヘンゼルとグレーテル』は竜退治型英雄譚と継子譚とのアマルガムとして成立したものと見ることができよう。

四

竜退治型英雄譚は『アルゴナウティカ』や『桃太郎』、あるいはKHM60『二人兄弟』におけるようにしばしばまた〈ふしぎな仲間〉（AT513）のモチーフと結びついて語られることがある。いま挙げた3話ではこのモチーフは十分に生かされていないが（このモチーフの代表的なものであるKHM71『六人組、世界漫遊』には竜退治型英雄譚の面影はすでになく、財宝獲得と結婚モチーフの名残りは認められるものの全体として笑話的誇張譚となっている）、このモチーフは本来〈弱者による同盟〉のモチーフから発達したもの

と考えられる。〈弱者による同盟〉の原形ともいうべき話は古代インドの説話集『パンチャタントラ』1－15「象に対する弱者の同盟」[25]とされる。ここでは象のために卵を壊された雀夫婦が啄木鳥と蝿と蛙の助けを得て象に復讐を果たすのであるが、力なき者が強力な者に打ち勝つためには知恵と協力が必要なことを教える寓話となっている。『ヘンゼルとグレーテル』も兄妹愛の物語としてその系列において見ることができようが、なんと言っても〈弱者による同盟〉をモチーフとする代表的なグリム童話は『ブレーメンの音楽隊』（KHM27 *Die Bremer Stadtmusikanten*）であろう。

『ヘンゼルとグレーテル』が敵（魔女）を殺し奪った財宝をもって帰還する話とすれば、『ブレーメンの音楽隊』は敵（盗賊）を追い出し、財産ごと家を乗っ取る話である。すなわち旅に出たロバ・犬・猫・雄鶏の四匹の動物は森で見つけた盗賊の棲家をいたく気に入り、盗賊どもを追い出しておいしいご馳走もろとも家を占拠するのであるが、その際、強力な武器を持たぬ〈弱者による同盟〉として奸策が用いられねばならない。四匹の動物があのぞっとする四重唱の叫び声をあげながら窓からいっせいになだれ込んだのがそれだった。そしてそれは大成功を収めたのだった。次に夜中みんなが寝静まった後、偵察にやって来た盗賊の手下に対して四匹の動物がそれぞれの持ち場で特性発揮の働きをし（猫は引っ掻く、犬は噛みつく、ロバは蹴る、雄鶏は有罪宣告する）、追い返すのに成功するが、これも偶然の結果と見えて実は、もしここに〈ふしぎな仲間〉のモチーフが働いているのに気づくなら、これは巧妙な戦術の成果なのだった。

ボルテ/ポリフカが紹介する『ブレーメンの音楽隊』の類話を見ると、12世紀にラテン語で書かれた動物叙事詩『イーゼングリムス』では鹿など弱い動物たちが泊まった宿で、跡をつけてきた狼とその仲間を撃退する。同じく12世紀にフランス語で書かれた『狐物語』ではいたずら者の狐ルナールが旅の仲間とともに不在中の狼の家でさんざん飲み食いした挙句、戻ってきた狼を殺してしまう。（ここには早くも〈愚かな鬼〉のモチーフへの傾斜が見てとれる。）この話は16世紀ドイツではハンス・ザックスとロレンハーゲンによって語られている。ハンス・ザックス（1551年）においては猫と雄牛と馬と雄鶏が一緒に旅に出かけ、それと知らず森の狼の家に泊まる。家に帰って

きた狼はこれらの動物に代わる代わるに攻撃されて恐怖にかられ逃げ出す。ロレンハーゲン（1571年）では牛、ロバ、犬など六匹の家畜の仲間がライオンや熊、狼などの猛獣を家から追い出し、偵察に戻ってきた狼を散々な目にあわせ、家を乗っ取ってしまう。

これらの類話においては基本的には家の所有をめぐっての争いとなっている。『ブレーメンの音楽隊』はこの話型の一ヴァージョンということになるが、森の中の家の持ち主もしくは先住者が盗賊となっているのは話に現実味を帯びさせるだけでなく、乗っ取り・略奪という行為の正当化、あるいは少なくとも不当性の印象の希薄化を意図したものと考えられる。弱者が復讐のために連帯して狡知によって強者を倒すストーリーであれば正当化され、賞賛されさえしようが、弱者とはいえ、正当な理由もなしに家を奪い取るためには、先住者は悪者でなければならなかったのだ。この行動の正当化の意図はすでに物語の発端から働いていたのだった。すなわちこれらの動物たちはロバも犬も猫も雄鶏も、それまで飼い主のために一生懸命働いてきたのに、役に立たなくなった途端殺されそうになり、出奔したのだった。それゆえ盗賊の財産の略奪横領は、盗賊もその一員（最も悪質な一員）である人間ども、無慈悲で身勝手で恩知らずな人間どもに対する正当な報復と見ることができるのだ。

（明治期に海外から入ったと思われるこの話の我が国の類話では報復ではなく、しばしば困窮した元の飼い主に奪った宝を土産に持ち帰る報恩譚に語り変えられているという事実[26]は、国民性の観点から興味深い。

ところで『ブレーメンの音楽隊』の後半で語られる、各動物がそれぞれの持ち場で特性を発揮して侵入者に打撃を与える挿話は我々には『猿蟹合戦』で親しい。栗·蜂·牛糞·臼がそれぞれの特性を発揮して蟹を助け、猿に仇討ちさせる。この話は明らかに『パンチャタントラ』と同じ系列に属する〈弱者による同盟〉を主要モチーフとする報復譚である。ところでそのような復讐のモチーフを欠く類話がグリム童話集の中に２編見られる。KHM10『ならず者』（*Das Lumpengesindel*）ではいたずら者の鶏夫婦に留め針・卵・縫い針を加えた旅の一行のため

に何の罪もない宿の亭主はさんざんな目に会わされる。（朝、顔を洗って手拭で拭こうとすると刺してあった留め針で顔を傷つける。パイプに火をつけようとかまどのところへ行くと卵の殻がはじけ飛んで破片が目に入る。椅子に腰を下ろすと縫い針が刺さる。）またKHM41『コルベス殿』（*Herr Korbes*）ではやはり鶏夫婦に猫・家鴨・卵・留め針・縫い針・石臼が加わり、家の主人に狼藉を働いた上、殺してしまいさえする。アァルネ/トンプソンの話型索引ではAT210として〈動物たちの旅の宿〉（AT130）や〈ふしぎな仲間〉（AT513）とは別に扱われているこの２話は復讐のモチーフを欠くため、純然たるいたずら話、物語としての結構を持たぬほとんど純粋にサディズム的挿話とさえ感じられる。『コルベス殿』などはまさに動機なき殺人で、その悪辣ないたずらに怪訝な感さえ覚えさせ、グリムもさすがに説明の必要を感じ、「コルベス殿はよほど悪い人だったにちがいない」と最後に一言補わざるをえなかったのである。だが他方、これだけむき出しな仕方での人間の悪意や嗜虐性の表れは無意識の領域からの直接的発現なのであり、この種の話の始原性の証と見ることもできよう。果たしてこれらの挿話的な話は動機づけ等のストーリー性を失った後世の頽落形態なのだろうか。それともストーリー性豊かな物語に発展する前の原基的構成部分として先に存在したものなのだろうか。

ちなみに、地理・歴史的方法の創始者アァルネは『ブレーメンの音楽隊』系の昔話をヨーロッパ型とし、旅仲間の卵・針・糞・臼らが宿の主人にさんざんいたずらを働いた末殺してしまうストーリーのものをアジア型で、かつこの話型の基本形式であるとした。[27] また稲田浩二も『ブレーメンの音楽隊』のようなヨーロッパ型のものより、牛糞や臼の登場するアジア型のものの方が、そこに原始的なアニミズムの観念が認められるがゆえにより古いものとしている。[28] それは確かに一理あるが、針や臼がその特性を発揮する話にアニミズムよりもむしろ機能の抽象化を見るなら、逆にこちらの方が進化した形態、より新しいものということにもなりうるだろう。）

五

『ブレーメンの音楽隊』の動物たちが無慈悲な飼い主たちの迫害から逃れてついに安住の地として見つけた森の中の盗賊の家は、まさに彼らにとってユートピアであった。日々の労働から解放され、毎日おいしいご馳走を食べられる森の中の家は〈怠け者の天国〉にも似たユートピアなのだった。竪琴を弾くロバは〈逆様の世界〉の寓意的形象として知られるが、音楽にいちばん縁遠いはずのロバが音楽隊のリーダーとして登場するこの話はまさにユートピア物語のパロディーと見ることができよう。

ヘンゼルとグレーテルにとっても森の中の魔女の家ははじめ夢のようなユートピアと見えたにちがいない。親に捨てられ、森をさまよった末にお腹をぺこぺこにすかせた二人はパンとお菓子でできた家で親切そうなお婆さんにいっぱいご馳走を出され、暖かいきれいなベッドに身を横たえたとき、「まるで天国に来たような気がした」のだった。ユートピアは一つの異界でもあるが、森の異界性は兄妹が森を出て家に帰ろうとするとき渡らねばならなかった大きな川に暗示されていよう。このとき二人は鴨の背に負われて魔女の森から父親の家のある現実の世界に戻って行ったのであり、川は異界と現実世界を隔てる境界を表していたのだった。

（ヘンゼルとグレーテルは白い小鳥に導かれるようにして魔女の家にたどり着いたのであったが、KHM21『灰かぶり』でも見られるように、鳥、とりわけ白い小鳥は此岸と彼岸を往還する霊性を帯びた存在―ここでは守護霊と考えられよう―だった。なお、川も白い小鳥も初版にはなかったもので、魔女の森の異界性を強調するために後から導入されたモチーフであろう。）

境界としての川のトポスはKHM29『三本の金の髪の毛をもつ鬼』にも見られた。ここに登場する渡し守は、わが三途の川にあたる冥界の川ステュクスの渡し守カロンを思わせる。主人公の若者はこの川を渡って地獄へ行き、そこに住む鬼の金の髪の毛を三本取ってくるとともに、行く途中で依頼された三つの謎の答えを聞き出してくるのであるが、お祖母さんに髪の毛を一本抜かれるごとに謎に答えてやる鬼はこの世のことをなんでも知っていて、明

らかに冥界の王（わが閻魔大王にあたる）の性格を示している。そこが冥界なればこそ帰宅した鬼が「人くさいぞ！」と言って騒ぎ、家中を探し回るのだ。闖入した人間を探しまわる「人くさいぞ！」という人食い鬼の叫び声は世界中の昔話で聞かれるが、これは本来、ようやく得た安らかな眠りを妨げられた死者の怒りの声ではないだろうか。[29] 冥界は一度入ると二度と出られぬところ、生者の侵入・来訪を固く拒むところなのである。オルフェウスやイザナギは特別の例外なのだ。（むろんまた異界たる冥界は清浄な天界にも転じうる。その場合は「人くさいぞ！」は涜聖への怒りの声ということになろう。）

さてこの彼岸から竜退治型の英雄たちが持ち帰るもの、それは『ヘンゼルとグレーテル』では真珠と宝石というふうに現実化されているが、それは本来イアソンが持ち帰る金毛羊皮のようなもの、すなわち彼岸たる異界にのみ存するもの、現実世界には存在しない呪宝のごときものであった。それゆえ実際『ヘンゼルとグレーテル』の類話であるペローの『親指小僧』では人食い鬼のところから持ち帰るのは七里靴であるし、『ジャックと豆のつる』でジャックが天上から盗んでくるのは金貨の詰まった袋とともに金の卵を産む鶏と歌う金の竪琴であった。

（ジャックに奪い去られようとするとご主人の名を連呼して急を知らせるこの金の竪琴と、オオクニヌシがスセリヒメを連れて黄泉の国から逃げ出す際、一緒に奪い去ろうとすると鳴りどよもして眠っていたスサノヲを起こした天の沼琴との間にいったいどのような関係があるのだろうか。ちなみに一つ目巨人ポリュペモス（キュクロープス）の一類話には、巨人が贈物としてくれた金の指輪はそれををはめた途端、「ここにいるぞ！」と主人公に叫ばせ続け、盲目となった巨人に主人公の居場所を教えるという挿話があるが、[30] 機能の点では同じと言えよう。

なお、高木敏雄『英雄伝説桃太郎新論』[31]によれば、桃太郎の鬼が島からの戦利品として「隠蓑隠笠打出ノ小槌」の三つの呪宝を挙げている類話もある。）

いったいに異界から持ち帰られる宝とは、魔法の力を持った呪宝なので

あった。そしてプロメテウスが天上より盗み出し人間の世界に持ち帰った火こそ、まさに呪宝の元型なのだった。それは神話的出来事とされ、神話として語られる。では金毛羊皮はどうだろうか。『アルゴナウティカ』という冒険譚成立の背景として、たとえばギリシャから黒海を越えて遠くコーカサス地方まですぐれた品種の羊や馬を求めに行ったというような史実はなかったのだろうか。そしてもしかするとその功績によりイアソンは王になったのではなかったか。話は変わるが、関敬吾は『桃太郎の郷土』[32]で神武東征神話を検証して、この物語は『桃太郎』あるいはアルゴナウテン伝説と同様、アジア･ヨーロッパ型昔話〈ふしぎな仲間〉と同系統に属するものだ、と結論づけている。では神武東征神話はたとえば『アルゴナウティカ』のような物語を元型とする普遍的話型〈ふしぎな仲間〉を下敷きにした日本ヴァージョンとして成立したのだろうか。事情はむしろ逆であろう。

ローマ建国の叙事詩『アエネーイス』やアイスランドの『サガ』（そしてわが記紀神話）が物語るごとく、太古の昔から地球上いたるところで植民活動がなされ、あるいは遠征が行われてきた。あの竜退治型英雄譚の図式（プロップを援用すると、被害/苦難－旅に出る－（不思議な援助者）－闘いと勝利－帰還・結婚）はひとりの人間の規範的な成熟のプロセスを物語るだけでなく、このような人類の征服や植民活動の歴史を反映したものと見られないだろうか。すなわち「被害/苦難」は敗戦や追放あるいは食糧難による移住や植民、「不思議な援助者」の機能としては〈旅の仲間〉、「闘いと勝利」の項では狡知と勇気を思い出すなら、そこに平行関係を見出すことができるだろう。すると最後の「帰還･結婚」の項は帰還型（『ヘンゼルとグレーテル』）と植民型（『ブレーメンの音楽隊』）に分かれることになり､帰還型では宝（と美女）を掠奪しての帰還、植民型では王国（と王女）を得る、がその内容となろう。

この仮説の当否はともかく、『ヘンゼルとグレーテル』や『ブレーメンの音楽隊』などのメルヘンはそのような人類の歴史の痕跡をとどめていないだろうか。神話や伝説、昔話が現実の歴史から直接生れたのでないことは言うまでもないが、その結晶軸となる核には史実が含まれていて、それが人々の空想力によって膨らまされ、さらには無意識的な願望やさまざまな動機に

よって潤色・加工を施されてこうした物語が成立したのだと考えられないだろうか。その際、潤色あるいは粉飾によって史実が歪曲されることもしばしばあったにちがいない。建国神話などはその代表的な例であろうが、たとえば『ジャックと豆のつる』の話でも異本の中にはジャックが盗み出す宝はもともと父親のものであり、殺された父親の復讐を果たすとともに取り返したのだとするものもあるように[33]行為（歴史）の正当化の意図は常に働くのである。先住民が天狗や鬼とされたように、物語において奪還される妻女もほんとうは掠奪だったのかもしれない。また英雄によって救出される乙女には太古の昔、水神に人身御供された若い女性[34]の面影が宿っているのかもしれない。あるいはまた土地の有力者の娘の婿としての資格審査に合格した若者とその一族の友好的にして平和的な植民の歴史の物語的証言だったのかもしれない。

神話、伝説、昔話など一般に口碑と呼ばれる民間で語り継がれてきた伝承はいわば生きた化石として過去の人間の生活の証言であるばかりでなく、現代にあっても世間話（現代伝説・都市伝説などと言われる）や大衆文芸・大衆芸能に潜り込んで命脈を保っているのである。その生命力の源はこれらの物語がなによりも人間の情念にもっとも深く訴えるものであったからにちがいない。昔話は今日では多く子供向きに無害化されて語られているが、たとえば関敬吾『日本昔話集成』第1部に収められた「猿蟹合戦」の類話たる第26話「猿と蟹の寄合田」などを読むと、苦しい労働の成果を卑劣な仕方で奪う者に対する怒りと憎悪が生々しく伝わってくるのであり、そして弱者の強者に対する意趣晴らしの痛快さが民衆の間でこの物語を語り継がせてきた力の源であったことが了解される。そこには武士階級による百姓人民に対する苛斂誅求、あるいは高利貸しによる無慈悲な取立てといった歴史的現実が背景にあって、このよく知られた昔話はそのような現実から養分を得ていたのかもしれない。一見他愛なく見えるこれら昔話にそのような歴史の反映、あるいは痕跡を認めることができるなら、民間説話と呼ばれるこれらの伝承から人間の歴史を明らかにするとともに人間の願望や情念、そして人間の本性そのものを探究することができるのである。

注

1 *Vgl*. Walter Scherf：*Das Märchen Lexikon.* C.H.Beck, 1995. Bd.1, S.550.
2 『ペロー童話集』（新倉朗子訳）岩波文庫、1985年、240頁以下。
3 J.Bolte/G.Polívka: *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*. Olms-Weidmann 1994, S.115ff.
4 板倉/佐藤編『もうひとりのグリム―グリム兄弟以前のドイツ・メルヘン―』（北星堂書店、1998年）では『ふたりの子を持つ女の美しい話』として紹介されている。
5 バジーレ（杉山洋子/三宅忠明訳）『ペンタメローネ』（大修館書店、1995年）５日目第８話『ニッニッロとネッネッラ』
6 道しるべのモチーフはKHM40『強盗のおむこさん』でも用いられている。ここでは灰は風に吹きとばされるが、えんどう豆とひら豆は芽が出て道を教えてくれる。わが国の『聴耳草紙』111番『お月お星譚』では撒いた菜種が春になって花を咲かせ、山奥から家まで一筋になって続いていたと印象的に語られている。
7 世界古典文学全集『ホメーロス』（筑摩書房、昭和46年）『オデュッセイア』（高津春繁訳）第９巻。
8 プロップ『魔法昔話の起源』（斉藤君子訳）せりか書房、1988年、71頁以下参照。
9 Brüder Grimm：*Kinder- und Hausmärchen*. Reclam 1980, Bd.3, S.25.
10 Jacob Grimm：*Deutsche Mythologie*. Akademische Druck- u. Verlaganstalt, Graz, 1968, Bd.1, S.429.
11 *Des Knaben Wunderhorn*. Gesammelt von Achim von Arnim und Clemens Brentano. Insel Verlag, S.220ff.
12 ルソー（今野一雄訳）『エミール』（上）岩波文庫、1982年、357頁以下。
13 仕立て屋の持つこのような負の社会的記号を指摘・強調したのは1993年富山大学で開かれた日本独文学会秋季研究発表会における木村豊の発表だった。
14 オーピー夫妻（神宮輝夫訳）『妖精物語』（上）草思社、1984年、12頁以下。また*Vgl*. Walter Scherf：*Das Märchen Lexikon*. Bd.1, S.484ff.
15 死と再生のモチーフはグリム童話のいたるところで出会われる。KHM6『忠臣ヨハネス』、KHM57『黄金の鳥』（狐の首を刎ねる）、KHM135『白い嫁ごと黒い嫁ご』（鴨の首を刎ねる）、あるいはKHM53『白雪姫』等枚挙に遑がない。
16 浅見徹も『玉手箱と打出の小槌』（中公新書、昭和58年）で、一寸法師は姫によって槌で打たれて殺されそうになったのだと考えている。（183頁以下参照）
17 佐々木喜善『聴耳草紙』筑摩書房、1965年、19頁以下。
18 関敬吾『日本昔話集成』（角川書店、昭和47年）第２部の１、276頁以下。
19 ヴェルナン『ヘシオドスのプロメテウス神話』。ヴェルナン/吉田敦彦『プロメ

テウスとオイディプス』（みすず書房、1979年）所収。41頁以下。

20 『イギリス民話集』（河野一郎編訳）岩波文庫、1993年、70頁以下。

21 ジョゼフ・キャンベル（平田・浅輪他訳）『千の顔をもつ英雄』（上）（人文書院、1996年）90頁参照。

22 実際、主人公は巨人のところにいた娘に助けられ、のちにこの娘と結婚して終る異本もある。オーピー夫妻『妖精物語』（下）153頁解説参照。

23 柳田国男『桃太郎の誕生』角川文庫、昭和48年、37頁参照。

24 野村純一『昔話の森』（大修館書店、1998年）第一章、および『新・桃太郎の誕生』（吉川弘文館、2000年）を参照。

25 『インド古代説話集―パンチャタントラ』（松村武雄訳）現代思潮社、1977年、83頁以下。

26 久保華誉『日本における外国昔話の受容と変容―和製グリムの世界』三弥井書店、平成21年、166頁以下参照。

27 伊藤清司『昔話伝説の系譜』第一書房、1991年、230頁。および関敬吾『日本昔話集成』第1部、169頁以下参照。

28 稲田浩二『昔話の源流』三弥井書店、平成9年、42頁以下参照。

29 その怒りにはまた生前の記憶の蘇りとともに生じた地上に残った者たちへの未練・妬みそして生命への憧憬・渇望も混ざっているのにちがいない。最も生命に富む幼い子供を狙うヘンゼルとグレーテルの人食い魔女には吸血鬼ドラキュラと同じイメージが働いているのかもしれない。

30 *Vgl*. Lutz Röhrich：*Sage und Märchen*. Herder, 1976, S.237f.

31 高木敏雄『人身御供論』宝文館出版、1990年、227頁。

32 『関敬吾著作集4　日本昔話の比較研究』同朋舎出版、昭和55年、220頁以下。

33 オーピー夫妻『妖精物語』（下）草思社。および稲田浩二編『世界昔話ハンドブック』三省堂、2004年、99頁参照。

34 石田英一郎『河童駒引考』岩波文庫、1994年、134頁参照。

Zusammenfassung

Das Märchen „Hänsel und Gretel“ (KHM 15) kann man als eine Art von Drachentöter-Märchen ansehen. Hänsel und Gretel gehen nämlich als Helden zur *anderen Welt* (Hexenwald), vernichten dann mittels Trick die Hexe (=Teufel/Drache) und kehren mit großen Schätzen heim. Sie erinnern an kleine aber mutige und listige Helden wie Odysseus oder das

tapfere Schneiderlein im KHM 20. Da kann man das Motiv » dummer bzw. betrogener Teufel « wiederfinden. Wenn man das Märchen „Hänsel und Gretel“ als eine Art von Drachentöter-Märchen in das Proppsche Schema presst, fällt auf, dass da das Motiv der Heirat des Helden am Ende der Erzählung fehlt, und fällt sogleich ein, dass Gretel die Stelle der zu errettenden Prinzessin, die der Held heiratet, einnimmt. Jetzt könnte man sich so vorstellen, dass hier sich eine Erzählung mit der Grundstruktur vom Drachentöter-Erzähltypus mit dem Kinderaussetzungsmotiv amalgamiert, indem sie dieses als Anfangsmotiv der Geschichte einführt.

An die Erzählung vom Drachentöter knüpft sich oft auch das Motiv » die ungewöhnlichen Kameraden « (AT513), wie bei der Sage von „Argonautika“, die als Urtypus dieses Motivs gilt, oder auch beim Märchen „Die Bremer Stadtmusikanten“(KHM27), bei dem man das Motiv » Die verbündeten Schwachen « leicht merkt. Hier überfallen die verbündeten Haustiere mit einer List die Waldhütte der Räuber, jagen diese hinaus und nehmen das Haus samt allen Speisen und Schätzen in Besitz. Es gibt auch solche Varianten, bei denen die Eindringlingen den eigentlichen Bewohner töten. Die Helden kehren dabei nicht mehr in die Heimat zurück wie in „Hänsel und Gretel“, sondern bleiben für immer in der neuen Utopie, also in der *anderen Welt*, wohnen. Kann man nicht in den Märchen wie „Hänsel und Gretel“ oder „Die Bremer Stadtmusikanten“ die Widerspiegelung der Geschichte der Menschheit erkennen, die immer wieder aus verschiedenen Gründen, so aus Hungersnot, wegen der Niederlage oder Vertreibung ihre Heimat verlassen und auswandern musste, um in einer neuen anderen Welt weiterzuleben, wie es „Aeneis“ oder die isländischen Sagas erzählen ?

Small Heroes in Grimm's Märchen — about "Hänsel und Gretel"

Yasumitsu KINOSHITA

Keywords: Hänsel als Drachentöter, Momotaro, Bremer Stadtmusikanten, eine andere Welt